

山と博物館

第28巻 第9号

1983年9月25日

大町山岳博物館



1 黒色土器 一杯 (墨書有り) 2 黒色土器 一杯 3 灰釉陶器 皿
4 灰釉陶器 皿 5 須恵器 長頸壺 6 黒色土器 一杯

五十畑遺跡発掘区内 大P8(土壙墓)出土遺物

土器に書かれた文字

数年前から発掘調査のおこなわれている大町市内の各遺跡は、古墳時代から平安時代に及ぶ農村のあとで、平安時代後半の住居址からは、どうかすると土器に墨で文字を書いたものが出土する。この頃になると、村にも筆墨を持ち漢字を書くことのできる人が、いくらかはいたことになる。おそらく村役人というか、支配層に属する人たちなのであろう。墨書土器の文字を読むことによって、その村の構成とか、それを使用した人の姓とか、さまざまな問題を解明する手がかりを得ることが多いが、何しろ長い間土中に埋もれていたものであるから、摩滅して読めなくなったものもあり、土器が欠けていて何という字かわからないものもある。

大町市内からはいまのところ六つの墨書土器が出土しており、社の五十畑遺跡からは碗の破片が発見されている。文字の書かれた器は、土師器の杯(どんぶり或は茶碗)である。三日町のあま池遺跡からは、杯の底に「奉」と書かれたものが出ていた。何と読んでいいかわからない。ごくしゃやくした筆づかいである。

借馬遺跡からは底に「東」と書いた杯が出土している。「ひがし」と読んで家名をあらわすと解するか、「あずま」と読んで所有者の姓と解したいがどうだろう。よく整った文字である。

五十畑遺跡の墓の副葬品の杯の腹には「?地」と達筆で記してあった。?は丹と読みたところだが、未だきめかねている。また同遺跡からは「真」か「夏」かわからない字を書いた破片が出ている。わからないのは下部を欠失しているからである。杯の腹に大きく、子どものお習字のようなまじめな字が、ゆつたりとした筆致で記されている。同じ村ながら、さきの「?地」の筆者とはちがう人であろう。ここは仁科御厨の中の村であるが、それと関りのある文字が出ればいいなと思っ

大町市の遺跡

農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財 包蔵地の発掘調査より

木村 隆 一

大町市の遺跡の概況

大町は、古代・中世の伊勢神宮領である、仁科御厨と皇室にゆかりある莊園の、仁科庄で古くから知られていた地であり、さらにさかのばれば、青木湖周辺に分布する。クマンバ遺跡で代表される、旧石器時代の遺跡から始まり、環状列石で知られる縄文時代前期の上原遺跡などの県史跡など数多くの遺跡をみ



借馬遺跡より検出された1号・2号竈穴住居址

ることができ、大町市内の遺跡数は、表1に示してあるが、表に見られるように、縄文時代・52、弥生時代・6、古墳時代より奈良・平安時代・11、中近世・22、古墳・14、時期不詳・4という順になっていて、やはり縄文時代の遺跡が多数を占めている。縄文時代の中でも、中期のものが多いことは、中部高地でごく普通に見られる現象であるが、それにもまして、前期の遺跡の占める割合が大きいため、前期の遺跡は、この大町、北安曇地方の特徴であると考えられる。また、早期の遺跡は、少ないながらも遺跡の立地を考えるうえで、貴重な存在である。

ここで、大町市内を平・大町・社・常盤の各地区に分け比較すると、平地区では、青木・中綱・木崎の仁科三湖周辺に縄文時代の遺跡が圧倒的に多く、仁科三湖を通り、鹿島川扇状地の東端を南流する、農具川の両岸には、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が多くみられる。また、今まで平地区で弥生時代の遺跡がほとんどみられなかったが、昭和54年より発掘調査の始まった借馬遺跡からは、弥生時代後期から平安時代にかけての大集落が確認された。また、木崎湖の南より始まる断丘上には、小規模ではあるが古墳の造架がみられ、東山から流れ出る沢などにより形成された、小さな扇状地や崖錐上には、小規模ではあるが遺物の散布地が確認されている。平安時代の遺

跡の中でも、灰釉陶器が出土している地点は断丘と鹿島川扇状地の接する付近に多い事から、鹿島川の氾濫の影響により、借馬遺跡のように扇状地の中心に立地していた集落が、山際などの小高い場所に移動したのではないかと考えられる。平地区でも西側を南流する、鹿島川の両岸にはほとんど集落の存在は確認できないが、鹿島川の氾濫から逃がられそうな場所などには縄文時代の遺跡を見ることが出来る。なかでも、新郷付近には、積石塚と思われる古墳の存在が4基ほど確認されていて、伝承によれば現在水田となつている場所にも2〜3基あつたようである。一つの文化圏があつた事を考えさせられずにはいられない。

大町地区は、中世以降、仁科氏により開発された地域であることから社寺跡や居館址などの中近世の遺跡がほとんどを占めていて、その数は9遺跡となり、狭い大町市内に9つの寺社と、現存の寺社等を合せて考えるに、小京都と言われたこともうなずけるのである。大町地区も平地区同様断丘上には縄文時代の遺跡がみられる。なかでも今年になって新しく確認された、カニガ沢遺跡は縄文時代も前期のもので、上原遺跡からも出土している諸磯B式の赤色された土器片も出土していることや、昭和57年度発掘調査を実施した長平遺跡からは縄文時代前期の、伊那谷から諏訪地方に及ぶ中越式土器が出土し、中越式土器文化の最北端の地となつたことなど、今

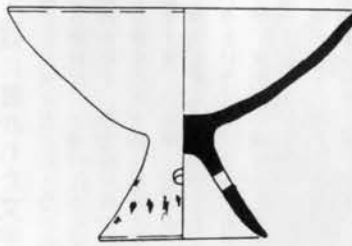


図2 弘法山古墳出土 高杯 (1:4)

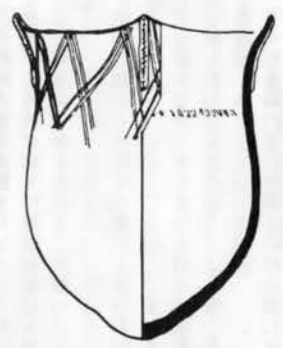


図1 阿久遺跡出土中越式土器 深鉢 (1:4)

時	代	遺跡数	計
縄文時代	草創期	2	52(13)
	早期	5	
	前期	13	
	中期	17(4)	
	後期	3(3)	
	晩期	3(6)	
弥生時代	不明	9	6(5)
	前期	0	
	中期	1(2)	
古墳・奈良・平安時代	後期	3(3)	11(22)
	不明	2	
	土師器	7(6)	
古	須恵器	3(0)	14
	灰釉陶器	1(6)	
	墳	14	
中近世	城址・居館址	14	22
	社寺址	8	
	時期不詳	4	
合		計	109

()内数は複合しているものを記載している

表1 大町市内時代別遺跡数一覧

料の蓄積を期待せずにはいられない。
 社地区は、縄文時代を始め、各時代の遺跡が見られる中で、大町市内でも数少ない弥生時代のものが集中している。遺物の出土例の多い遺跡としては、現在の館ノ内県営住宅のある道ばた遺跡がある。この遺跡はほとんど煙滅したと思われるが、松本平の弥生時代中期末の、百瀬式土器に類例をみることで、小形甕などが出土している。また、弥生

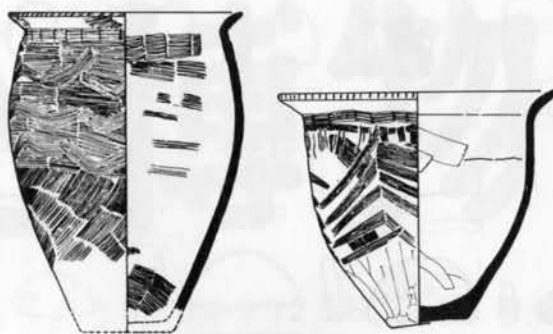


図3 道ばた遺跡出土 百瀬式土器 甕 (1:4)

時代には、稲作が営まれていた事が通情考えられてきているが、稲作と一体のものとして考えられている石包丁の出土例が無い事から、大町市内での水稲耕作に疑問を持つこともできるが、最近になり同遺跡から出土した高杯の脚部底にモミの痕跡がみつかったことにより、弥生時代におけるこの地方の水稲耕作を考えるうえで役立つ資料の一つとなった。
 常盤地区は、ほとんどが縄文時代の遺跡でなかでも保存状況が一番良いものに、県の重要遺跡に登録されている、菅ノ沢遺跡がある。

この遺跡からは過去に縄文時代中期最終末に編年されている、諏訪富士見町で検出された居平遺跡の第3号住居跡出土の一括資料を標式とした、曾利V式に類例をみる深鉢形土器が出土しているが、遺跡の範囲などについても詳細な調査が行なわれていない。
 東方に対比するならば西山際に沿って縄文の世界が広がっている。



図4 居平3号住居跡出土 加曾利V式 深鉢 (1:4)

このように、各地域により時代の異なる遺跡が確認されていることは、これらの地域性の違いが、各時代の人々を定着させ、各時代により移り住んでいったのか、または、分布調査が進んでいないことから、各時代の遺跡が確認されていないのかは、大きな課題の一つでもある。

表2 借馬遺跡堅穴時期の相対年代による

3C	1	1
5C	前	14
	後	14
6C	前	7
	後	4
7C	前	4
	後	4
8C	前	6
	後	6
9C	前	4
	後	3
10C	前	1
	後	5
11C	3	3
時期不詳	3	3

(相対年代による)

農業基盤整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の経過
 以前より、大町市内での埋蔵文化財の学術調査は、上原遺跡など数例にすぎず、それがかえって遺跡の保存を助長していたものの、近年の大規模開発の波の中で、今度は逆に調査の遅れが裏目に出ており、ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査は、時間的、金銭的な制約の中で、緊急度を増して続けられ、広範囲にわたり遺跡が消えさつてゆく中で、従来遺跡の発掘調査が殆ど行なわれたことはなく、遺跡のあり方を知ることには合せ、文化財を保護するうえに、微力なりに成果を上げられることを期待し、長野県中信土地改良事務所により施行された、平、社地区のほ場整備事業が、仁科三湖から平地区を通り南流する農具川流域の遺跡と、社地区の段断上に数多く分布する遺跡地帯にかかると、次のように緊急発掘調査がなされた。
 昭和52年度—平地区—米見原遺跡
 昭和53年度—平地区—分水遺跡
 昭和54年度—平地区—借馬遺跡 I
 昭和55年度—平地区—借馬遺跡 II
 トチケ原遺跡 III
 昭和56年度—平地区—借馬遺跡 III
 追分遺跡
 社地区—前田遺跡
 南原遺跡
 昭和58年度—社地区—五十畑遺跡
 これら8遺跡であるが、付近には、まだ未調査の遺跡が点々と連続している。
 発掘調査された遺跡の概況
 (借馬・前田・五十畑遺跡より)

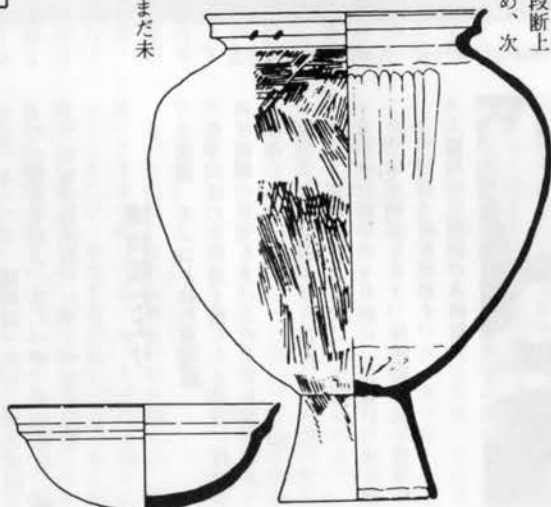


図5 借馬遺跡出土 S字口縁 甕 布留式杯 (1:4)

址が、発掘区内から検出されなかったことや、弥生時代の遺物を保有するものの資力が僅少であったことが、発掘区設定のむずかしさを感じさせられずにはいられなかった。しかし

借馬遺跡
 昭和54年度より3ヶ年にわたり発掘調査が進められた借馬遺跡は、発掘調査面積三二五〇㎡、総事業費二〇〇八万円という長野県下でも大規模な発掘の一つとなった。検出された遺構は、堅穴住居址・84、掘立柱建物址・36の他、溝や旧河川の跡、柵列状遺構などがあり、3C-11Cにわたるこの地方の古代人の生活を知るうえで、ある程度成果を上げることができたのではないだろうか。
 検出された堅穴住居址を堅穴住居址内より出土した遺物の相対年代により、時期分類を試みると、表2のとおりを考え方ができるが、この地方の歴史の流れを考えるうえで、古墳時代の初頭の古式土師器を保有する堅穴住居

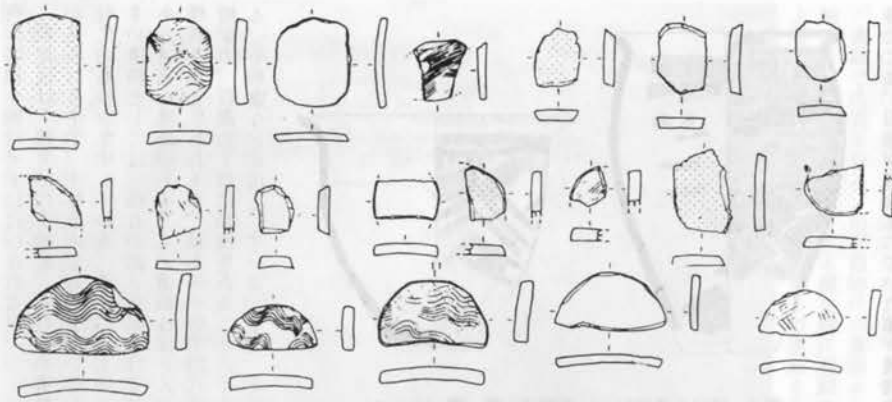


図6 借馬遺跡45号住居址出土 土器片製品 (1:4)

過去において出土した、東海系のS字目縁を持つ台付き甕や、布留式土器に類例をみる杯などの古式土師器を大切に保管していた地域住民の方がいたことは幸いした。発掘された遺構や遺物については、各報告書により詳細が記載されているので、ここでは取り上げないが、借馬遺跡の中で一軒だけ検出された、弥生時代後期の箱清水式土器文化に属すると考えられる45号住居址は、床面に赤色塗彩され

た2個体の甕を埋め込み、炬が作られていてこの住居址からは、土器片の周辺を打ち欠き、軽い研磨や、しっかりと研磨を加え半円形、楕円形、隅丸方形等の形状に加工したものが保有されていた、製作方法は、土製円板や、土器片錘に類似するが、確認されただけでも40個体に及び、その形状は細部において皆異なる。用いた土器片は40個体とも堅い焼きで、赤色塗彩された土器片によるもの12個体、楕円形状をもつ土器片によるもの9個体、八ケメをもつ土器片をもちいるもの5個体となる。さらに類似する半円形のもの、径が5cm-7cmの円を半円に欠いて研磨した大ききものが多い。これらの製品の目的あるいは、性格づけは保留せざるを得ないため、土器片製品として仮称された。

前田遺跡は、昭和56年度に発掘調査された遺跡で、発掘面積は四〇〇〇㎡、総事業費三〇〇万円であった。検出された遺構は、堅穴住居址・34、掘立柱建物址・4の他、溝跡や土塚墓と思われるものがあり、7C後半から12C初めの資料となり、借馬遺跡から始めたこの地方の土器形態の流れを知るうえで、空白部分を埋めることができるものであった。土塚墓と考えられたものの発掘は大町市では始めてであり、遺物の保存状態もよく、平安時代の後期後半の土師器供膳形態に多くみられるものが一組となって保有されていた。中でも黒色土器の耳皿1と高台の付された杯2は、内外面でないいなヘラミガキの後に黒色処理されたもので、松本市の神戸遺跡より出土したものに類似すると思われるが、堅穴住居址内より出土していないため、前田遺跡でのど



図7 前田遺跡出土黒色土器耳皿 (1:4)

の時期に位置付けられるのか明確ではなかった。

五十畑遺跡

五十畑遺跡の発掘は、仁科神明宮に近く、「ゴジョ」または「ゴジョ」という名前から「ゴシヨ」にして、仁科氏に係る資料が出土するのではないかと期待をして、発掘面積2万㎡、総事業費一三〇〇万円という大規模な発掘調査となり、現在なお調査が進められているが、約80の堅穴住居址と掘立柱建物址・5の他、土塚墓、溝跡、小鍛冶址などが検出された他、出土遺物は多種にわたって保有されていた。中でも今まで破片でしか出土していなかった、白磁や緑釉陶器の他、灰釉の三足壺・墨書のある土器や木銭などが堅穴住居址内よりみつかった。また、同じ堅穴住居址内より出土しているものなかに円面硯があるが、この堅穴住居址は、掘立柱建物址と重複関係にあり、こちらの掘立柱建物址に關係のあるものではないかと考えられている。その他堅穴住居址の床面下に約30cmぐらい掘り込まれた小さな土塚の中にドンダリの炭化したものがつまっていた。炭化したものの詳細な調査は現在進めている最中にあるが、今までに麦・モモカアズの実・トチの実なども含まれていることがわかってきている。なお、時期的なものなどについては今後整理が済み次第報告書により公表できると考えている。

まとめ

以上のような成果が近年行なわれたほ場整備事業に伴う事前の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であるが、本来埋蔵文化財は、破壊する事なく静かに土の中に包蔵されていくべきものであって、次の世代の人達に伝えてゆくのがあるべきである。私達の責任でもあると考えるのですが、自分達の生活を考えると共有することのむずかしさを感じさせられずにはいられません。近い将来本当に埋蔵文化財を必要とする時代が来た時、もう一つの

遺跡も残っていないほど破壊が進まないよう今の私達は心がけたいものです。

参考文献

(大町市教育委員会)
・篠崎健一郎他「借馬遺跡I」大町市教育委員会一九八〇年、篠崎健一郎他「借馬遺跡II」大町市教育委員会一九八一年、森嶋稔他「編年」信毎書籍出版センター一九八〇年。

博物館だより

企画展 キノコと秋の草花展

昨年同様の企画展を催したところ、好評で再度開催の要望も多いため今年も左記のように開催します。

・期間 9月23日~9月27日(5日間)

・キノコ鑑定会 9月25日(日曜日のみ)

・企画展期間中の9月26日(月曜日)は休館日ですが開館します。開館時間は午前9時より午後5時までです。

・入館料 企画展のみ無料。



キノコ鑑定会

山と博物館 第28巻 第9号
発行所 長野県大町市 TEL. 〇二二一
大町市山岳博物館
印刷所 長野県大町市後町 大栄タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共一切手不可)
郵便振替口座番号 長野四一三三九二